



晩年の久蔵



久蔵と郁子夫人



筆を走らせる久蔵



生家跡に設置された胸像



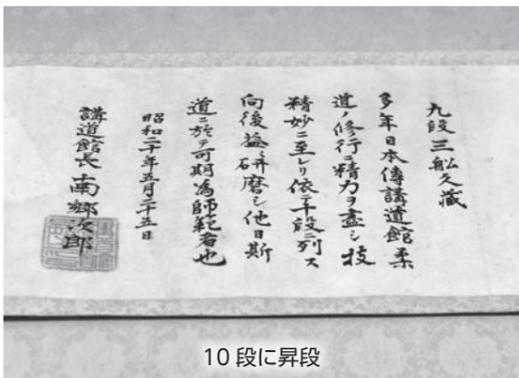
岩手県スポーツ少年団柔道大会で好成績を残した三船十段記念館柔道スポーツ少年団



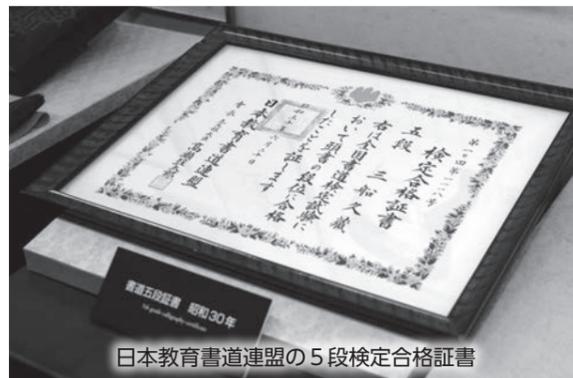
久蔵が書いた「文武一道」



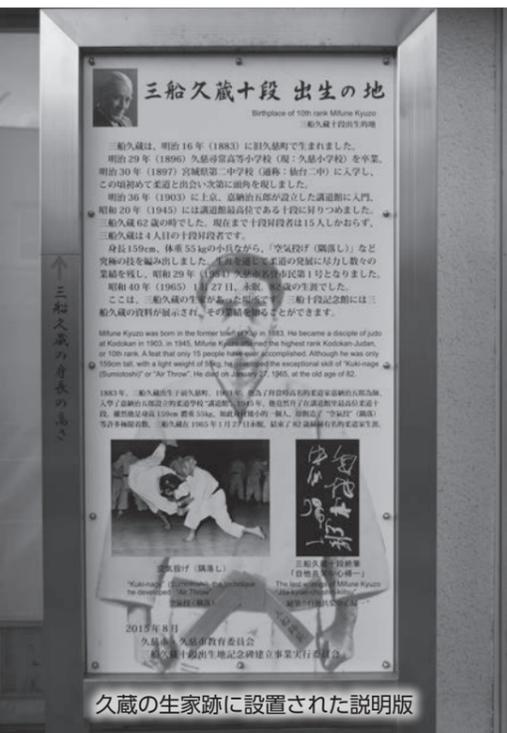
勲二等瑞宝章



10段に昇段



日本教育書道連盟の5段検定合格証書



久蔵の生家跡に設置された説明版

技は芸術であり 文武は一道である

久蔵は、事あるごとに「技は芸術であり、文武は一道である」と言っていたそうです。「武」のみならず「文」にも力を入れていました。

将棋や書道も名人級

久蔵は柔道以外にも、才能を発揮しています。子どもころから興味を抱いていた将棋もその一つ。手作りの駒で将棋を指していたほど、将棋好きでした。実力も相当なもので、昭和28年には日本将棋連盟から3段を授与されるほどでした。平常心、先を見通す眼力、集中力など、柔道を極めるものにとって欠かすことのできない精神力の多くを、将棋から学んだといわれています。

書道もかなりの腕前で、多くの作品を残しています。

久蔵は「柔道は動の世界であるが、人間は動だけでは

調和がとれない。静の境地に入って考える習慣をつけなければならぬ」と、静と動の調和を図っていました。この静を鍛えるために書道に力を入れていたといわれています。

昭和30年には、日本教室書道連盟から5段を授与されています。

文武一道

久蔵の書に「文武一道」というものがあります。この言葉には「よく文武は両道といわれ、文と武が並行して伴わなければならない」と言われているが、私は柔道においては文武一道でなければならないと思っっている。文のない武は真の武ではなく、武のない文は真の文ではない。これは文武を二つに分けて考えている結果で、文武は分けられるものではない」という久蔵の思いが込められています。

久蔵と郁子夫人

大正元年（1912）、久蔵は29歳のときに、8歳年下の郁子夫人と結婚。2人の初対面は結婚式当日だったそうです。

「三船久蔵の十段は、先生の5段に奥さんの5段、二人合わせて10段だ」と門下生の一人が語るように、柔道一筋に生きた久蔵の陰には、しっかりと家庭を守り、夫を精神面から支え続けた郁子夫人の内助がありました。久蔵も郁子夫人に全幅の信頼をおき、新しい技をあみだすと、真っ先に郁子夫人に説明して意見を求めたそうです。

郁子夫人や娘の絢子も、久蔵の手ほどきで柔道をたしな

みました。久蔵は講道館でも、女子柔道の普及に力を尽くし、女子柔道の要点をまとめた「講道館女子護身法」を作りました。

受けつがれる精神

久蔵は、柔道の発展や普及に多大な貢献をしたことが認められ、久慈市名誉市民第1号や文化功労者、勲二等瑞宝章など数多くの栄誉ある表彰を受けています。

柔道が盛んな久慈市。この背景には、近代柔道の基礎を築き、講道館の最高位である10段にまで上り詰めた、久蔵の力があります。毎日、稽古に励む道場生には、久蔵の「文武一道」の精神がしっかりと受け継がれています。



熊谷 好徳さん(小久慈) 三船十段記念館 館長

三船十段記念館

三船十段記念館では、柔道をはじめ将棋や書道など、三船十段の生涯や業績を紹介しています。展示室には、柔道着や筆、愛用品を展示。ビデオ・モニターでは、当時の貴重な映像を紹介しています。

年間1200人から1300人が来場するのです。遠方からの来場者が多いです。観光客ももちろん来場しますが、記念館を目的にしている人も多く、三船十段の偉大さを改めて感じています。

三船久蔵の凄さ

十段の名のとおり、三船十段は柔道の神様。記念館では久蔵が技を披露している映像を上映しているのですが、そのときの久蔵はなんと70歳超。到底まねできるような動きではありません。

素晴らしい練習環境

記念館の道場は東北でも最高レベルの練習環境だと思えます。他県の団体も練習しに道場を訪れています。市民体育館では、有名選手を招いての柔道教室や東北から強豪校が集まる大会なども開催しています。

記念館で柔道に励んだ子どもたちも、大活躍しています。過去には全国大会優勝者や上位入賞者もいますし、現在の道場生たちも今年の2月に開催された「第41回岩手県スポーツ少年団柔道大会」で団体優勝。見事全国大会の切符を手に入れました。

今後の期待

柔道の競技人口は久慈だけではなく全国的に減ってきています。競技人口も増えてほしいですが、みんなが長く柔道が続けてくれればと思っています。将来、三船十段や久慈出身で世界チャンピオンになった柏崎克彦選手のような世界に通用するような選手が、久蔵からまた生まれてくれればと願っています。